



LFPI

日本液体清澄化技術工業会

Summer 2024

News Letter

Vol. 108

マオリに学ぶこれからの企業経営視点

最近、ニュージーランドにしばしば行くようになった。20年ほど前に観光旅行したことがあったがその時は仕事もないし二度と行く機会はない国だなと思っていた。最近は木屑など未利用資源を活用するビジネスを展開するために訪問している。

ニュージーランドの原住民であるマオリ族、近年になってニュージーランド国内における土地と天然資源に関して管理を任されるようになったと聞く。元々の姿に戻った形だ。特に原生の植物を利用する場合に関してはマオリすべての部族が集まる会議での承認が必要で、たやすく自然由来の資源を活用する事ができない仕組みになっている。あるとき、当社プレゼンの機会をいただきマオリ族を前にして「私たちは2050年からのバックキャストでビジネスの有り様を決めている」と話すと、先方からは「我々は500年先も続けられることしかやらないのだ」と切りかえされ、1本とられたことを思い出す。

彼らの根底に流れている考え方の一つが八百万の神の存在である。日本でいう神社のような祈りの場所もある。マオリ族が企業や団体と新たな関係を結ぶ場合にはその部族の長老や主要なメンバーが認めなければならない。合意されると、祈りの場所に招かれ、神聖な儀式を執り行い八百万の神の前でお互いの将来にわたる関係性を誓いあう。祝詞に始まり、歌や踊り等の交流、そして部族の主要な人物との間で鼻をすりあわせて契りを交わす。本当に素晴らしい文化が継承されている。

このような文化はマオリだけでなくオーストラリアのアボリジニ、ハワイやオセアニア諸国など太平洋上にある島国の原住民に共通する。森羅万象のあらゆる物に神が宿り、その中で人間も自然の一部として生まれてきたという観念が備わっている。つまり、自然からの恵みに感謝するとともにその脅威も知っていて祈りを捧げるという文化を共有しているのだ。

世界はSDGsやESGなど、今になってやっと利益に優先されるべきことに気がつき、地球温暖化をどう解決するか、生物多様性をどうするなどの活動を始めたが、これら太平洋に浮かぶ島国の民族は太古の昔から当たり前のように自然と調和する生活様式を創造してきたのだ。

日本は明治維新以降、かつて持ち合わせていた自然に対する畏敬の念を忘れ、企業利益を優先し自然環境を劣化させる事もやむなしとする社会に移行させてしまった。

我々企業経営者としての役割は、八百万の神に畏敬の念を抱くと共に人が自然の中で生かされているという観念を持つ人財を育成し、社会全体が自然と調和できる生活様式にできるようなコトやモノを提供することではないかとあらためて考える今日この頃である。



リファインホールディングス株式会社

川瀬 泰人